

idea

ニュースレター「アイデア」

2022. 9

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 那須浩修さん(後編)
- 3 | 団体紹介 | ゆうの会
- 5 | 地域紹介 | 田河津第5区自治振興会(東山)
- 7 | 企業紹介 | 千葉本店(室根)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴⑥ 地域における各種団体の底力を侮るな
- 9 | センターの自由研究 | 地名の謎ファイルNo.6「黄海(きのみ)」



今月の表紙
雪上での戦いの様子が描かれた看板。向かって右、逃げ帰ろうとしているように見えるのが源頼義率いる国府軍、勝利を治めたのが衣川を本拠に奥六郡を擁する大豪族安倍一族です。極寒の中での戦いに、源頼義はわずか7騎で命からがら逃れたのだとか。一説には、この時の「とある光景」が由来となった地名があります。はたして……？(自由研究)

古代東北の英雄たち
天喜五年(1057年)陰暦鎮守府將軍源頼義は、そのと共に千八百の兵を引き連れて奥六郡に向かった。衣川を本拠に擁する大豪族安倍一族は、

古代東北……われわれの祖先は、英雄を中心に各地に半独立国を築き、平和な暮らしを楽しんでいた。しかし、畿内の政府は東北地方の併合を図り、常に多賀城の鎮守府に命じて北方侵攻を続けていた。

発行 いちのせき市民活動センター 〒021-0881 一関市大町4-29 なのなプラザ4F Tel:0191-26-6400 Fax:0191-26-6415 ホームページ:https://www.center-i.org/ メール:centar-i@tempo.ocn.ne.jp

idea

おしらせ

<p>募集</p> <p>「ゆうの会」 会員募集中</p> <p>本誌「団体紹介」にてご紹介した「ゆうの会」では、一緒に活動してくれる会員を募集しています。</p> <p>主な活動は、毎週水・日曜日に行う日本語教室での日本語指導(日本語で日本語を教える)ですが、経験や資格等は問いません。国際交流に興味がある方なら誰でも入会可能です。入会や見学等については下記までお問合せください。</p> <p>活動日: 毎週水・日曜日 時間: 13時30分～15時 活動場所: なのなプラザ内会議室 (一関市大町4-29) 問合せ: 0191-34-4711 (一関市国際交流協会が窓口)</p>	<p>情報</p> <p>ふれあい交流館 「なに〜か・あ〜る」</p> <p>一関市大東町の猿沢地区振興会(ふれあい委員会)では、地域内の空き家を活用した「ふれあい交流館『なに〜か・あ〜る』」を令和4年6月より開設しました。毎月第1・3週の土日が開館日で、ふれあい喫茶やフリーマーケット、作品展示、各種教室など、毎月様々なイベントを企画しています。誰でも気軽に立ち寄ることが可能です。詳しくは下記までお問合せください。</p> <p>開館日: 毎月第1・3週の土日 開館時間: 10時～12時 場所: 大東町猿沢字倉林74番地 入館料: 無料(イベント参加料は別途) 問合せ: 0191-48-3366 (猿沢地区振興会)</p>	<p>発表会</p> <p>岩手県南史談会 研究発表会2022</p> <p>岩手県南、宮城県北の地域史を調査・研究する「岩手県南史談会」では、毎年、研究発表会を開催しています。今年度は畠山篤雄氏による「赤荻外山の石室について」のほか、高橋紘氏、赤塚喜恵子氏による研究発表を行います。どなたでも聴講可能で、参加費無料、予約も不要です。発表内容など、詳細は下記まで。</p> <p>日時: 2022年9月18日(日) 開場 9時30分 発表 10時～11時30分 会場: 一関文化センター 小ホール (一関市大手町2-16) 問合せ: 0191-24-3741 (岩手県南史談会事務局・大島)</p>
<p>募集</p> <p>雅楽静(うたしず) 箏・三弦教室 生徒募集</p> <p>生田流正派邦楽会大師範・雅楽静(うたしず)による箏・三弦教室では生徒を募集しています。</p> <p>小学生向け、大人向け、それぞれに初心者用の「手ぶらでスタート」コースもご用意。和楽器を楽しむ、和楽器文化を知ることからスタートします。最初の目標は「さくら」をひいてみる。無料体験も可能です。下記までお問合せください。</p> <p>教室名: 雅楽静(うたしず)箏・三弦教室 練習日: 月3～4回の個別指導 場所: 一関市花泉町油島字南沢11 料金: 小学生初心者コース 5,000円 大人初心者コース6,000円 中級・上級者コース7,000円 問合せ: 0191-82-4604(二階堂)</p>	<p>募集</p> <p>藤江建典さんによる バスケットボールスクール 参加者募集</p> <p>「岩手ピックアップ」に所属していた(2018-2019シーズンはキャプテン)元プロバスケットボール選手・藤江建典さんがスクールコーチを務めるバスケットボールスクールをプレ開催しています。11月から本格的にスクールとして活動予定で、現在は月に4～5回、市内各地の体育館で練習を行っています。個人のスキルアップや「考えるバスケット」の指導が目的です。詳細は下記QRコードからご覧ください。</p> <p>スクール名: B base 主管: 株式会社アインズ 問合せ: 右記QRコードより(公式LINEアカウントへ)</p> 	<p>講座</p> <p>自治会長サミット Vol.15</p> <p>自治会や民区、集落公民館など、地縁活動を担う組織の三役レベルのみなさんに向けた情報交換の場「自治会長サミット」。今回は、「役職交代における業務の引き継ぎ方法」をテーマに、より良い「引き継ぎ」のための工夫や取り組み、今後のための「理想の引き継ぎ方法」など、情報交換を行います。完全申込制(10月12日締切)、先着40名の定員です。</p> <p>開催日時: 2022年10月19日(水) 13時30分～16時 会場: 一関市東山市民センター 2階大会議室 問合せ&申込: 0191-26-6400 (いちのせき市民活動センター)</p>

まちの写真展 スタッフがまちの1コマを切り取ります。



作品名 **「視線を感じて」**

東山町田河津・高金地内の市道(田河津市民センター)から東山支所に向かう方向で目にとまる「ポイすてて見ます」の看板。同エリアの「高金・石ノ森子ども会」では、毎年夏休みにポイ捨て禁止の看板を作成し、地区内に設置しています。



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	54922	-12	24558	0
花泉	12233	-8	4708	4
川崎	3300	-5	1282	-2
千厩	10011	-11	4124	9
大東	12179	-7	4921	5
東山	5984	-13	2284	-2
室根	4495	-9	1776	1
藤沢	7256	-16	2799	-6
一関市全体	人口 110380	-81	世帯数 46452	9
	出生数 39	2		

2022年8月1日付
(2022年7月31日現在
住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

164 / 110,380

那須 浩修

ISMS (情報セキュリティマネジメントシステム) 審査員補。大学卒業後、複数の大手企業にて情報セキュリティ等に関するシステムエンジニアとして従事。令和元年に早期退職すると、同年6月から令和4年5月末まで「地域おこし協力隊」として地元一関市に着任。岩手県商工会連合会の「エキスパートバンク」に情報セキュリティの専門家としても登録、活動中。昭和39年生、一関市大東町出身(在住)。



「仮想空間」の中における交流が進みつつある現代(イメージ)。イラスト：佐藤大輔

第98回

那須 浩修さん

いちのせき市民活動センター センター長 小野寺 浩樹

「情報」の「価値」と「権利」 ～ IT社会で求められるリテラシー【後編】～

「情報」に溢れる昨今、情報を正しく取り扱うための「情報リテラシー」が私たち一人一人に求められています。さらには「IT」も急速に発達していく中で、ITを正しく活用する「ITリテラシー」も必要に。情報セキュリティ関連の事故も少なくない中、私たちは何を意識し、ITの流れにどこまで「適応」していくべきなのでしょうか？(2回シリーズの後編)。

小野寺 「情報リテラシー」の考え方を確認した上で、いよいよ「IT」そして「ITリテラシー」の話題に入っていきますが、「関係ない」と思っているページを飛ばしてしまう人も少なくない気がします(笑)

那須 ITって知らず知らずのうちに生活に入ってくるものなんです。情報を取得して、加工・保存、伝送するための科学技術がITですから、携帯電話がスマホになって、LINEやフェイスブックなどのSNSを使うようになったように、もはや多くの人がIT技術の恩恵に触れているわけです。

小野寺 スマホが受け入れられなかった世代も、気づけばスマホデビューしてますもんね。

那須 そう、無視したくても、いざそれが標準になってしまえば、取り残されるだけです。

小野寺 那須さんは「情報セ

キュリティ」分野の専門家ですが、「IT」と「情報セキュリティ」はどう関連しますか？

那須 IT、要はインターネットが扱うのは「情報」です。安易に扱ってはいけない情報がたくさんあるわけですが、その意識がないのと、ITを正しく理解しないまま「使い方」だけを覚えて使っている人が多いので、個人情報などを出してしまうんですよね。

小野寺 ITを理解しないと、犯罪に巻き込まれることもあれば、加害者になることもある…。

那須 ITはものすごく発達してしまつたので、理解することが難しい。そのせいでリスクもわからなくなつてしまつていて、有効に使うとすればいくらかでも有効利用できるし、悪用しようと思えばいくらかでも悪用できる。だから「ITリテラシー」が必要なんです。

小野寺 リスクを知らないままITを使い続けることにリスクがあるので、正しい知識・理解(「リテラシー」が必要)と。

那須 重要なのは、リスクはITの発達とともに変わっていくということ。IT技術の発達に合わせてリスク管理の方法も見直さなきゃいけない。だから企業や行政においてはIT関係を扱う人はリスクマネジメントをしっかりとやるべきなんです。地方だとその意識が希薄。なんでもかと言うと大手企業からの下請けだったり、大手企業に委託してしまっているから。

小野寺 確かに「大手企業がやってくれているから大丈夫じゃないか」という感覚はあるでしょうね。

那須 リスクマネジメントは自ら考えないと意味がないんです。「言われたから、言われた通りにやっています」はリスクマネジメントとは言えないんです。

小野寺 これは全ての業界に関係することですよ。我々まちづくりの業界にも。「IT業者

じゃないから」ではなく、IT業者じゃないからこそ、ITリテラシーを高めて、リスクマネジメントをしなければいけないということですよ。情報を扱わない業種なんてないですから。

那須 「デジタル田園都市国家構想」を国が進めています。地方でもそれぞれの地域に合ったITサービスを行いなさいよ、首都圏とのIT・デジタルサービスの格差をなくしましょうよという内容。でもこれって住民にもITリテラシーが備わっていないと意味のない話で、今までITを意識していなかった人たちにいきなり「どうぞ」と言われても何の恩恵もない。

小野寺 確かに。でも実際のところ、我々市民レベルは、「IT」と言ってもSNSくらいしか意識できない気も…。

那須 IT業界では、SNSはもはや古いものになっていますよ(笑)今の主流は「メタバース」。簡単に言えば「仮想ビジネス」です。この「仮想ビジネス」と、「暗号資産」が今後の大きなキーワードでしょうね。

小野寺 イメージできません(笑)

那須 「仮想」というのは実は昔からずっとあるものです。違うのは、「仮想(バーチャル)」と「現実(リアル)」が交わり始めているということ。「暗号資産(仮想通貨)」は、無形のコインと言えますが、形がない上に発行主体や管理者もいないんです。そこに価値を持たせるのが「ブロックチェーン」という仕組みです。

小野寺 管理者がいないというのは怖い。気軽に手を出せるものではない気が…。

那須 そう、大事なものは「納得してから手を出す」こと。理解

しにくいから詐欺にも狙われるんです。とにかくITは「関係ない」「これで十分」と思っている人も、業態を変えながら入ってくるんです。そこには仕掛け人もいるけど、根底は皆さんの欲求・要求。メタバースも、コロナ禍でリモートでできることへの欲求が増した。それで仮想空間に対する技術が開発され、後から法整備がついてくるという流れ。

小野寺 消費者が望んだ展開とは言え、リアルな世界がますますない人が増えそうですよね…。

那須 それも含めて「ITリテラシー」を高めようということ。

小野寺 技術を開発するの人も、情報を扱うの人も。だから人と結ぶのはそういうのが重要になると思うんですが、そこが追いついていない気がして。情報や人とのコミュニケーションの在り方、超えてはいけない境目とか、「IT教育」ではそういう部分を忘れちゃいけないのかなと感じます。

※3 任天堂が2020年に「ニンテンドースイッチ(Nintendo Switch)」対応ソフトとして発売したゲーム。
※4 2009年に取引が開始された「ビットコイン」を支える技術として開発された「取引の公明な記録を残す」ための仕組み。改ざんが非常に困難で、多数の参加者に同一のデータを分散保持させる「分散型台帳技術」とも呼ばれるが、明確な定義はなく、開発者の詳細も定かにはなっていない。

※1 情報誌『idea』8月号(本対談前編)参照
※2 岸田内閣の看板政策の1つであり、第205回国会の岸田文雄首相による所信表明演説において表明されたもの。

団体紹介

日本語学習の支援で目指す「多文化共生」

在留外国人が増え続ける 一関市の現状

ゆうの会
平成10年5月発足。毎週水・日曜日に日本語教室を開講し、在留外国人(フィリピン、中国、ベトナムなど)の日本語学習を支援。同会の名称には、「YOU(あなた)」「友」「遊」「優」などの意味が込められている。現在の会員は12名。

〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4階(「一関市国際交流協会」経由)
TEL: 0191-34-4711(同上)

写真:「書き納めの会」の様子(令和3年12月)

平成31年4月、外国人の日本在留資格に「特定技能」が創設されました。人手不足の産業分野において、即戦力となる外国人を受け入れるための資格であり、日本へ入国する外国人は今後も増加していくと予想され、当市にも800人以上の在留外国人(以下、外国人)が居住しています。

一方で、「受け入れ側の体制はどうでしょう。当一関市でも多文化共生を推進していますが、一般市民が外国人と交わる機会がまだまだ少ないため、どこかお客さんとして見てしまっているところが、本当の意味で多文化共生を推進していく必要があると思います」と語るのは、「ゆうの会」副代表の熱海アイ子さんです。

「一関市及び近隣に在住する外国人とのより良い共生を目指す」ため、平成10年から「日本語学習の支援」を主軸に活動を始め、現在は週に2回、外国人向けに日本

ゆうの会

語教室を開催している同会。長年に渡り、当市に暮らす外国人を支援してきた同会の活動と、その活動を通して見える課題を伺いました。

外国人に日本語支援をし続けて

中学生の頃から英語が好きで、外国に興味があったという熱海さんは、30代の頃から「一関ユネスコ協会」に所属し、様々な国の人々と交流をしていました。

平成7年頃、同協会の活動で交流のあった外国語指導助手(ALT)に「日本語を教えてほしい」と頼まれます。快諾した熱海さんですが、いざ日本語指導のテキストを見ると「動詞などの文法をどのように伝えたら良いか悩んだ」と言い、外国語として学ぶ日本語の難しさを痛感します。

そんな折、偶然にも岩手県国際交流協会が「日本語ボランティア養成講座」を開講することを知り、ALTへの日本語指導を続けなが

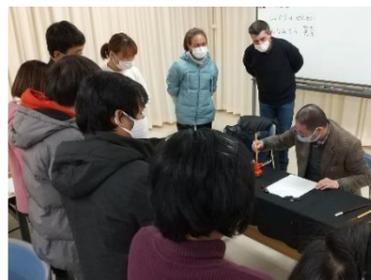
も教えていきたいという抱負も。

外国人が「地域社会の一員」として「普通の暮らし」ができる、本当の「多文化共生」を目指し、同会は今後もその一助を担い続けます。

- Photo gallery -

「今年の一文字」を

年末に行う「書き納めの会」では、外部講師を招き、筆などの使い方を学んだ後、自分の思う言葉を書き記します。



ゲーム感覚で学ぶ

日本語学習の一環として、ゴール地点の写真だけを渡し、道行く人に日本語で尋ねながらゴールを目指す企画を昨年度初開催。



日本の文化で初笑い

年始に行われる正月行事では、日本の「福笑い」を体験。参加者同士が交流しながら、一つの作品に仕上げていきます。



受講者は市内外から

現在25人ほどの外国人が登録する日本語教室では、テキストを使用しながら受講者のレベルに合わせて学習支援を行います。



「日本語で日本語を教えるが、抽象的なものほど教えるのが難しい。また、丁寧な言葉で教えようとすると逆に相手は混乱する。『やさしい日本語』で話すことの大切さを、支援を通して知った」と語る熱海さん。「日本語教室の受講者の中には、介護士の資格取得を目指し、漢字を猛勉強した外国人もいた。合格が発表されたときには、

「外国につながる子どもたち」へのサポートも

平成10年5月、熱海さん同様の想いを抱く5人で「日本語学習の支援」を主軸とする同会を発足。当初は週に1度、平日夜に開講していた日本語教室ですが、ALTや企業の労働者として雇用される外国人だけでなく、国際結婚の外国人も多いことを知り、昼にも教室を開講。その後、平日は仕事で受講が難しい外国人もいることを知り、日曜開催を追加。受講者のニーズに対応しています(現在は水・日曜日の昼)。

みんな喜んで」と笑顔も見せます。

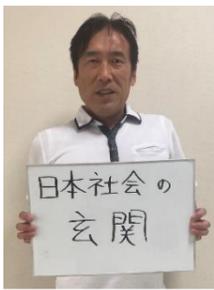
当市に住む外国人の中には、家族で滞在するケースも増えており、そこでの必要になるのが「学校へ通う」「外国につながる子ども」への日本語支援です。日本語には「生活言語」と「学習言語」があり、前者は日常生活の中で使う言葉を指し、子どもも覚えやすいと言いますが、後者は教科書や授業で使われる言葉のため、覚えるまで丁寧な支援が必要だと言います。

同会では、そのような子どもを支援するため、平成18年頃より一関市教育委員会と連携を図り、市内の小中学校へ出向いての支援を開始。これまで支援してきた子どもたちの人数は約70人になると言い、熱海さんと一緒に学校へ出向いて支援を行っている同会の代表・鈴木宏さんは、「この場所に住む以上、日本語を学ぶことは必要不可欠です。今後関係機関と連携をとりながら子どもをサポートをし続けたい」と語ります。

日本語学習の支援だけではなく、浴衣の着付けや生け花、煎茶・冷茶の淹れ方教室など、外国人が日本の文化を体験できる事業も展開している同会ですが、今後は災害発生時に必要となる情報や、ワンマン電車の乗り方、切符の買い方など、日常生活に関わること

Q.あなたの考える「日本語支援」とは？

代表



A. 日本社会の玄関

鈴木 宏さん

今年度から代表となった鈴木さんは、令和2年に日本語教師資格取得。一関市国際交流協会のボランティア登録をきっかけに同会の活動に関わり始めました。

※外国語として「日本語」を教える
語学教師の民間資格

副代表



A. 「ちがいを楽しむ

熱海 アイ子さん

同会を立ち上げ、昨年度まで代表を担ってきた熱海さんは、市内外で日本語学習の支援に携わってきました。今後は鈴木さんをサポートしながら同会を支えます。

田河津第5区自治振興会(田河津)

行政区は「田河津5区」。旧東山町の北西に位置し68世帯185人が暮らす。会長、副会長、事務局長、各部長(教養部、スポレク担当部、交通担当部、納税推進部、防災担当部、保健担当部)、班長、会計監事で構成される。班数は7班。



左の写真：令和元年度に実施された環境整備事業の時の集合写真

田河津地域の中心部を守る責任

東稲山の東麓に位置する丘陵性の山地である田河津地域において、地理的にも中心部であり、世帯数・人口も田河津地域では最多である田河津第5区。小字は野土、大森・石ノ森の一部で構成され、一関市田河津市民センター(以下、市民センター)や駐在所などの公共施設、企業(工場)も5社ほど立地しています。

旧東山町内では一関市合併直後から自治会等の発足が進み、同行政区も平成18年4月に「田河津第5区自治振興会(以下、同自治会)」を発足させました。

独自の会館がない同自治会では、定期総会などの大規模な集会は市民センターを活用し、その他の集会は野土消防コミュニティセンターを活用。そのため、毎年6月には日頃利用している公共施設やその周辺の環境整備を、班ごとに手分けして行います。あわせて、県道沿いにある花壇も整備するな

東山

田河津第5区自治振興会

各戸の距離をカバーするいざという時の仕組み

ど、田河津地域の印象を左右するエリアの環境保全を担っています。

7つの大きな事業を掲げ、そこから具体的な取り組み・事業を展開している同自治会。その1つに「防災に関する事業」があります。「高齢化社会においては、手助けが必要な方々をもちろなく把握することが重要。限られた人だけではなく、地域全体で支援・見守りができる仕組みを構築することが課題です」と語るのは、同自治会会長の菅原篤夫さん。背景には、同集落の地理的要因があります。

山間集落で、各戸の距離が離れていることから、異変があっても気づきにくく、災害等が発生した際の対応にも不安がありました。

そこで平成23年、防災担当部では、同自治会エリア内の災害危険箇所の把握に取り組みます。把握した情報は、同自治会独自の防災マップ(ハザードマップ)を作成す

無理のない仕組みで、みんなが楽しく

ることで見える化。同時に、消防団や東山地域防犯協会田河津分会、民生児童委員らと協力し、避難時に支援を要する人(災害弱者)の名簿を作成しました。

名簿の作成にあたって意識したのが、その要支援者が常時在宅なのか否か。それぞれが持ち合わせている情報を元に、「在宅の要支援者」を明らかにすることで、有事の際に優先的に支援が必要な家を明確にしました。なお、名簿は随時更新しており、「行政でも把握しきれない、近所だからこそわかる情報」の共有を心がけています。

子どもたちのために繋がれてきた「盆踊り」

帰省客も集う毎年8月14日には、市民センター前庭を会場に同自治会主催の「盆踊り大会」が開催されます。

昭和40年代後半から「野土父母の会(現・野土子ども会育成会)」が盆踊り大会を開催していましたが、地元企業も盆踊り大会を始めたことで、父母の会としての開催は一時中断しました。

数年間の中断を経た昭和60年頃、同行政区内にある「観林寺」の境内で、迎え盆行事である「御霊祭り」が行われます。この時の父母の会会長が観林

寺の副住職(現東堂)だったこともあり、父母の会が同境内で盆踊り大会を開催し、盆踊り大会を兼ねた御霊祭りとなったのです。

これを機に、子どもたちの思い出作りや親世代の交流の機会として父母の会としての盆踊り大会も復活。同行政区内の親子約50人程が出店や花火大会(手持ち花火)、スイカ割りなどを楽しんでいましたが、少子化の影響で次第に企画・運営が困難に……。平成21年、23年は休止を余儀なくされました。

そんな状況を見ていた菅原さんは、「子どもたちにとつての大切な行事を絶やしたくない」と一念発起。提灯などの道具を譲り受け、盆踊り大会の実行委員会を同自治会内に設けたことで、平成24年より、自治会事業として盆踊り大会の再開にこぎつけたのです。

盆踊り大会の中で行われるスイカ割りには、集落内の農家が自主的にスイカを提供してくれることも。また、近隣企業にもご案内することで、社員等が来場することもあり、自治会・住民・地元企業間のつながりを生む貴重な機会にもなっています(コロナ禍で令和2年、4年度は中止)。

副会長の菅原幹男さんは「当自治会では特に『これをやろう』という決める事は設けておらず、『いつまでもみん

なが楽しく仲良く過ごせること』をモットーにしています。長期的なことを考えて、事業も無理のない範囲でやることを心がけています」と、臨機応変な自治会運営で「みんなが楽しい」状態を目指していきます。

Q.集落の自慢は何ですか？

会長



A. 野土は私たちのふるさとです。

すがわら つたお
菅原 篤夫さん

6期11年目。行政区長も兼務する菅原さんは、田河津地域の地域協働体「田河津振興会」の会長でもあります。

副会長



A. みんな元気で長生きを!

すがわら みきお
菅原 幹男さん

3期6年目。教養部長を経て副会長に就任。12年に渡り自治会運営を支えています。これからの目標は「元気でいること。これが一番大事」。

- Photo



集落のシンボル
過去に盆踊り大会を行っていた「観林寺」の「シダレヒガン(樹齢350年以上の桜の古木)」は市の天然記念物です。



綺麗に咲かそう
県道長坂東稲前沢線に繋がる市道沿いに設けられた花壇。市民センター周辺の環境整備と合わせて定植作業を行います。

gallery -



日頃の感謝を込めて
令和元年に実施された環境整備事業の様子。各班の住民が力を合わせて市民センター周辺を丁寧に刈払います。



もしもに備えて
東日本大震災翌年に発電機を購入。同自治会では消防団など各種団体と協力して、自主防災力を高めています。

室根 千葉本店

明治4年創業(今年で創業150年)。室根山の残雪の美しさにあやかって作られ、昭和43年に「第17回全国菓子大博覧会」で金賞を受賞した「元祖白あんぱん※」が看板商品(同商品のみを製造)。その後も同大会で2度受賞(昭和59年に「名誉大賞」、平成10年に「審査総長賞」)し、最盛期には1日2,000個~3,000個を製造(販売には時期的な波あり)するほどの需要が。現在は店頭販売のほか、道の駅(川崎、室根)、地元スーパー(すずまーと)に卸しています。

※小麦粉・薄力粉・砂糖・水を混ぜ合わせた生地で白あんを包み、焼いたあと、表面にグラニュー糖をまぶした真っ白な焼菓子。「白あんぱん」という名前の由来は不明だが、当時は「白あんぱん」と称する菓子を製造・販売する店舗が他にもあり、室根の中の元祖が同店であったため、3代目が「元祖」を名称に付け加えた。

変わらない味を守り継承する難しさ

「今、私は製造も卸しも、店頭販売もすべて一人でやっているんです」と話すのは、今年で89歳となる4代目店主の千葉利有さん。「昔は沿岸と内陸を結び商店街として賑わい、従業員も雇っていたんですけどね」と、店内に飾ってある良き時代の写真を眺めながら「この通り(室根商店街)も、バイクができたことで交通量が減り、お客様もめっきり減りましたからね」と続けます。

宮城県気仙沼市で菓子製造業を営む家庭に生まれた千葉さんは、自身も菓子職人の道へ進むべく、学校卒業後、和洋菓子の修業で仙台へ。その後、気仙沼市や陸前高田市などで菓子職人として勤務すると、後継者不在となった「千葉本店」の3代目から縁あって声がかかり、昭和32年、24歳で千葉家の養子となります。

「当時は本当の手作りでね。夜が明ける前から餡練りをはじめて、手包みして約千個作る。だけど苦に思ったことはないね。この味をどう継承して次に繋げていくか。どんなに辛くても『継承していく』ということが私には大事だった」と当時を振り返る千葉さん。継承当初は包装

「村の賑わいと共」…… 「白あんぱん」の今昔

紙も無かったため、手作業で包み紙を制作し、1個1個手包みしていたのだとか。

砂糖などが配給制となった戦時中は製造を中止したものの、戦後の復興期には非日常の「特別な土産」として人気に。「この量の砂糖がまぶされていますから、よっぽど『特別感』はあったでしょうね」と千葉さん。高度経済成長期以降は「地元の銘菓」として冠婚葬祭の手持ち菓子や、「ちよつとしたお使い物菓子」として、普段菓子用ではないものの、日常的な流通も増加しました。

「元気で頑張ってる」の声に えたい

そんな需要最盛期に4代目へと就任した千葉さんがまず行った改革が「製造工程の一部機械化」。先代が守ってきた味を崩さぬよう、餡や生地づくりは手作業のままで、包餡や包装を機械化したことにより、一日の生産数も大幅にアップしました。



- 1 四代目店主の千葉利有さん。
- 2 千葉本店で製造する唯一のお菓子「元祖白あんぱん」。
- 3 周辺の千葉の名家であり、分家は商店などを営んでいたことから「千葉本店」という名称に。

DATA
〒029-1201
一関市室根町折壁1丁目15
TEL&FAX 0191-64-2040

現在も白餡の製造以外は一人で行っており、「継承の難しさ」を実感しているという千葉さんの、何よりの励みですが、お客様からの「元気で頑張ってるほしい」という声。「以前は息子に菓子職人として継いでもらいたいという気持ちがあったが、息子から『足腰が弱まる前に店をたんで、こつち(仙台)で暮らさないか?』と言われている。足腰が丈夫ならずと白あんぱんを作り続け、お客様の『頑張ってる』に伝えたいというのが私の本音」と、心の内を明かします。

菓子職人となって70年以上、今も変わらず明け方には作業を始め、6時半には製造を終えます。7時過ぎには卸先への配達に明け、戻り次第店頭販売というハードな業務を一人でこなす日々。

今後の「継承」の可能性は模索中ですが、「皆さんの声が励みです」と、生涯現役で「白あんぱん」を作り続ける意志と覚悟を感じます。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴②
地域における各種団体の
底力を侮るな



博識社の フクロウ博士

第42話

地域における「各種団体」の役割

まちづくりや地域づくり活動の世界では、「各種団体」と表現される団体があります。これは、専門性を持った団体であり、いまでこそ「NPO」と表記されたりしますが、NPOは広義的な表現であり、もう少し絞り込んで考えておく必要があります。

自治会はじめ、地区体協(〇〇地区体育協会)や消防団、福祉推進協(〇〇地区福祉推進協議会)などは、**地域で活躍するいわゆる「各種団体」**です。専門的なテーマを持ち、これまで地域を支えてきました。今でも、です。しかし、地域活動に関わる住民が減り、役の担い手不足が課題となる中、**その存在自体が負担視されるように……**。人々が地域の中で、安心して健やかに暮らすために、しっかり支えてくれているはずなのに、です。

確かに会員の高齢化や減少により、活動の停滞は否めませんが、かつて人が多かった時代の話聞かせていただくと、精力的な取り組みや数々の伝説があり、それらを経験した人たちがまだ関わっているということは、それだけで地域における各種団体の底力はあるのです。

専門的なテーマがなくても、**青年部や婦人部(女性部)も、我々から見ればものすごく重要な役割を担っていた**と思っています。地元就職が主だった時代は、就職と同時に地域の青年部に入り、親睦を深めつつ**‘地域での暮らし’**を考え、事業をしたり、時には婚活のようなことも。**人々が支え支えられていたのですが、今は、「人」ではなく「情報」に支えられているように感じます。**何をすることもインターネット検索をし、そこに出てくる情報があたかも正しいと判断してしまう。まちづくりに関する事例もそうですが、**「情報」が基準になってしまい、「関わる人の考えや発想」がないがしろにされ、結果的に考える力が低下しているように感じています。**

かつては、年代ごとに**地域に関わる仕組みが自然に構築され、相互交流と相互学習**を繰り返し、住民の娯楽や憩い、自治振興の基礎を築いていました。かたや現代は、技術の進展により**集団から個の時代になり、地域と関わる流れが自然に訪れることは皆無に等しい状況**となっています。だから、**「地域づくり」という文脈の中で‘人の関わり’を創り出し、‘支え支えられて生活することの大切さ’を伝えていかなければいけません。**

なくすのではなく、イマの役割に合わせていく

本誌でも度々取り上げていますが、地域住民が地域の役を受けないのは、単に役をやりたくないという理由だけではないようです。**「その役が何をするのか分からない」「関わったとして否定される」**ことが人を遠ざけてしまっているのです。多世代が同居し、家庭内で情報の共有がなされていた時代は、地域の役やその内容なども家族会話の中で自然にインプットされていましたが、今は核家族が当たり前の時代となり、回覧板などで案内が回ってきても、**‘そもそもの情報’がない状態なので、役を引き受けるためのハードルが高い**のです。

それに対して「役を担ってくれない」とこぼしても、ボタンの掛け違いです。これまでの当たり前が通用しない時代と捉え、**地域内に存在する各種団体の目的や役割の重要性をしっかりと伝えることから仕切り直しが必要**です。やってしまいがちなのは、嫌われないようにと‘楽しいよ’と発信すること。受け手が求めているのは‘楽しさ’ではなく、その役割の**‘必要性’に共感するための情報**です。

地域における各種団体にとって重要なのは、「地域住民の関わり」と「継続性」です。見直しの時代であるいま、「役のなり手がいない」「負担が大きい」という安易な理由でなくすのではなく、**目的を振り返り、「どのように現代流にしていけるか」**を考えることが大事です。安心安全な日々が続くと、**‘いざという時の備え’**につながる意識が低下します。何もなければいいのですが、何かあった時には地域における各種団体の存在が重要になります。しかし、何かあった時というのは非日常的なことなので、優先順位は低く考えられてしまいます。それゆえに各種団体の不要論につながってしまう……。

人口減少時代を迎えるにあたり、役の担い手が減少し、慌てて後継者を探したり、育成の動きが進められています。明日、明後日に人口減少になるのではなく、20年程度の時間をかけて少しずつ減っていくわけですから、慌て過ぎず、今のタイミングでしっかりと仕切り直しをしてからでも遅くはありません。**地域を支えてきた各種団体には底力があるので、その力を発揮できるよう、目的と活動内容を現代に合わせていきましょう。**

どの由来が事実に近いのか 深掘りしてみた

黄海に伝わる地名由来は複数あることがわかり、中には歴史的なロマンを感じさせる説も。果たしてどの説が由来としては有力なのか、史実を整理しながら、少しでも（歴史ロマンを否定しない程度に）深掘りしてみました。

「黄海」という地名の歴史年表

「黄海」という地名が文字として記録されている書物や、伝説的な話を年表に落とし込むと、以下のように整理されます。

平安	802年以降	磐井郡が置かれ、現在の黄海は「磐井郡沙沢(ますざわ)郷」に含まれる。
	806~810年頃	坂上田村麻呂が「鱒淵の馬頭観音」への御礼参りの帰りに北上川の洪水に遭遇し、「黄金郷は 黄海郷 になった」と発言した。
	1057	「前九年の役」における「 黄海の戦い 」が起きる。
	1068~1185	『陸奥話記』にて「 黄海 」の文字が確認できる。
室町	12世紀頃	「 黄海保 」の成立(奥州藤原氏の時代と推測される)。
	1189	奥州合戦ののち葛西清重が賜った「五郡二保」に「 黄海保 」が入っている。葛西氏の統治下で「 黄海保 」が存続。
戦国	1500年頃	「 黄海氏 」を名乗る地頭あり(「 黄海高行 」から5代ほど続くも大崎葛西旧臣の一揆にて滅ぶ)。 ※南北朝の末頃にも「 黄海備前守信賢 」なる者が存在していた？
	1590	奥州仕置で葛西氏の統治が終わる。→その後「 黄海保 」は実態を失い、その中心地は「 黄海 」・「 黄海郷 」・「 黄海村 」などと呼ばれるように。
江戸	安永(1772~1781)	仙台藩領 磐井郡「 黄海村 」。
		『安永風土記』の中で、「 黄海 」の由来を「 前九年の役によって敵の死体から流れ出た血が沼に入り、水面が黄色になったことによる 」と伝える。
明治	1869	版籍奉還により、黄海村は胆沢県に編入される。
	1889	町村制の施行により「 黄海村 」が発足。黄海村98番地に役場が置かれる。
昭和	1955	藤沢町、黄海村、八沢村、大津保村の4ヶ町村が合併し、「 藤沢町 」が誕生。「 黄海 」は藤沢町の大字名に。

気になるポイント

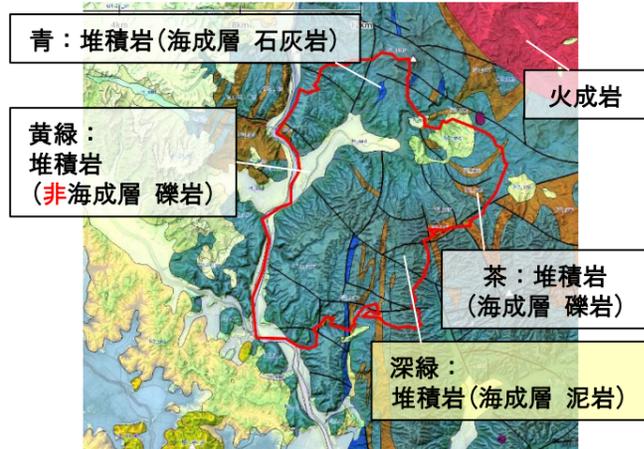
文字として確認できる「**黄海**」で最も古い記録(書物)は、平安後期に書かれた『**陸奥話記**(前九年の役の顛末を記した書)』で、「貞任等率精兵四千余人、以金為行之河崎柵為營、拒戦**黄海**。(=貞任らは精鋭の兵士4000余人を率いて、金為行の河崎の柵を陣営として**黄海**で防ぎ戦った)」という一文があります。「**黄海の戦い**」の際にすでに「**黄海**」と呼ばれていたのか、この本が書かれた際に「**黄海**」と名付けられたのかは読み取れません。

なお、「**黄海の戦い**」が「**黄海**」の由来だという説は、『**安永風土記**』に明記されていますが、上述の通り、定かではありません……。

地理・地質的要因に見る「**黄海**」

「昔は海(湖)だった」ことに地名が由来するという説や、それに伴う伝説(「湖水の伝説」)も存在する**黄海**。『カシミール3D(DAN杉本氏作成/スマートフォン版は『**スーパー地形**』)』というアプリで地質を見てみると、**黄海**のほぼ全域が海成層の堆積岩で形成されているという結果に！北上川を挟んで隣接する花泉町・日形地区は同じ堆積岩でも非海成層なので、**黄海**までが現在の宮城県気仙沼市方面から続く海だった可能性を素人ながらに妄想。ちなみに、**黄海**に伝わる伝説上では現在の雫石町付近まで続き、深さも数百丈という大きな湖があったとされています。

また、水害時の光景に由来する説に関しては、河川整備が進んだ平成に入っても大きな水害に見舞われている地域であり、古くから水害が頻りに発生していました。ヒアリングでも「カスリン・アイオン台風の際はまさに海の入江のような光景だった」という話があり、濁水が黄色い海のように広がった光景が目には浮かびます。



写真左は平成14年水害時の**黄海**地区の浸水状況(岩手河川国土事務局提供)。寛政3年に発生した**黄海川**の氾濫「お菊の水」では、現在の**黄海川**が流れる場所にあった「**二日町**」が町ごと流され、そこから川の流れが変わったとか。写真右は**黄海**地区小日形集落の秋の風景。こうした黄色い海のように稲穂が広がる光景は、**黄海**地区の各所で見るができます。

<参考文献> 黄海村史編纂委員会(1960)『**黄海村史**』/黄海を語る会(2016)『**黄海歴史ロマンマップ**』/芳門申龍(1997)『**岩手の地名百科** 語源・方言・索引付き大辞典』/「**角川日本地名大辞典**」編纂委員会 編(1985)『**角川日本地名大辞典3 岩手県**』/柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太 周・犬井善壽(2002)『**新編日本古典文学全集41**』

地域の「気になること」をセンタースタッフが独自に調査！

センターの自由研究

ミッション
70

地名の謎 ファイルNo.6 「**黄海(きのみ)**」

市内の「由来が気になる地名」について深掘りする「地名の謎ファイル」。第6弾は藤沢町の「**黄海(きのみ)**」。北は川崎町薄衣、西は北上川を挟んで花泉町日形、南は宮城県登米市と接し、北上川の支流「**黄海川**」の下流域に位置する農村地域です。江戸期~昭和30年までは「**黄海村**」でしたが、「**きのみ**」と読めない人も少なくはないこの地名。果たしてその由来とは何なのか、複数の説を整理し、当センターなりに検証してみました！

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。



「**黄海**」という地名の由来は複数あり、村史等の文献でも紹介されています。口伝で残されてきた説も含めると、今回の調査では全部で7つの説が集まりました。それぞれの説の詳細は下段でご紹介しますが、気になるのは「**実際のところ、地域住民にはどの説が浸透しているのか**」。黄海含む藤沢町在住の人に「どの説を知っているか(複数回答可。26人にヒアリング)」アンケートをとってみたいところ、最も多く知られていたのが「**洪水時の光景**」に由来するという説でした。次いで多かったのが「**黄海の戦い**」に由来する説。特に洪水時の光景に由来する説については、小さな頃から大人に聞かされていたという**黄海**住民が多く、防災教育や水害史の伝承という観点でも語り継がれ、浸透している可能性があります。なお、**坂上田村麻呂の発言**に関する説も、洪水に関する内容ですが(下段参照)、認知度は高くないという結果でした。

「**黄海**」の由来 文献&口伝まとめ

1 昔は海・湖だった

大昔、現在の**黄海**エリアは一面の湖もしくは海であり、底が深く、水の色が黄色だったとされる説。『**黄海村史**』には「**蠣(牡蠣)**の貝殻の化石が残っている岩がある」と記載されていたり、ヒアリングの際にも「現在の**曲田**にある山の中腹~山頂で貝の化石堀をした」という経験がある人も。

2 3 洪水&坂上田村麻呂の発言を機に

大同年間、**坂上田村麻呂**が蝦夷を平定し、現在の宮城県東和町・鱒淵地区にある**馬頭観音**(**田村麻呂**が建立した「**華足寺**」のことと思われる)に御礼参りに行った。その帰り道に激しい雷雨にあい、北上川が洪水となっているのを、**田村麻呂**が高い丘の上から望見した。その時に**田村麻呂**が「**黄金郷は黄海郷**となった」と言ったことから、この地方を**黄海郷**と呼ぶようになったという説。※当時、当地域は産金地であり、**黄金郷**と呼ばれることがあったらしい。

また、そうした洪水が頻りに発生し、洪水時には黄色い海のように見えることからという説。

4 「**黄海の戦い(合戦)**」での出来事から

東北地方の豪族である**安倍氏**が反乱を起こしたことで、陸奥国の国司が数千の兵を率いて攻めたことに始まる「**前九年の役**」。

1057年、**安倍頼時**が戦死し、**安倍貞任**が後を継いだことを受け、同年11月、**陸奥守・源頼義**が多賀城の国府軍1,800人を率いて**安倍氏**の残党を討つべく出陣(**黄海の戦い**)。4,000騎(人)で迎えた**安倍氏**側は極寒と吹雪を味方につけ、国府軍は大敗。**黄海川**を挟んで対峙していたため、国府軍の数百人の死体から流れた血で**黄海川**が黄色く濁ったとされ、その光景から**黄海**と呼ばれるようになったという説。

5 アイヌ語の転訛

『**岩手の地名とアイヌ**』によると、**黄海**はアイヌ語の「**ケネ・オマ**」の転訛で、「**鱒の棲んでいる所**」という意味であり、現在の**黄海川**から起こったものという説。

6 7 「**鮭の遡上**」&「**秋の稲穂**」の光景

黄海川に**鮭**が遡上し、産卵のために**鮭**が固まると黄色く見えることから。また、**田園**地帯であり、**秋の稲穂**が広がる光景が黄色い海のように見えることから。

ミッション
71

暮らし調査「たばこどき」
ファイルNo.17



田植えの時期になると、田んぼのあぜ道などで和気あいあいと休憩をとる光景を目にします。この「農作業の合間の休憩」を当地域では「たばこどき」と称し、煙草を吸う・吸わないに関係なく、大人も子どもも「たばこどきにすっぺ」の合図で休憩をとっていたようです。そして当地域に伝わる「郷土菓子」の多くは、この「たばこどき」の定番メニューとして伝承されてきた可能性が……。 「たばこどき」から見える当地域の「農家の暮らし」を整理しました！※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。